

明治初期の外賓による北海道巡覧に関する研究：アイヌと外賓の関わりを中心に

谷中 章浩（北海道教育大学大学院教育学研究科）

報告者は修士論文において、明治初期(開拓使期)に北海道を訪れた 4 名の外賓——ロシア皇族アレクセイ・香港総督ヘンネッシー・ドイツ皇孫ハインリヒ・イタリア皇族ジェノヴァ公——を対象とし、彼らの北海道巡覧・アイヌ巡覧の詳細な内容について、開拓使文書等の資史料を精査し詳述した。特にアイヌを対象とした巡覧については、「純粹」のアイヌを巡覧したいというドイツ皇孫ハインリヒの主張に関わって、森村及び周辺地域のアイヌ「和風化」について当時の状態を推測した。その上で、外賓による北海道巡覧・アイヌ巡覧の対象及び特徴について分析・考察を行った。

先行研究では、外賓の来日に関しては外交という観点から論じられ、外賓の北海道巡覧については明らかにされてこなかった。北海道史や市町村史を扱った書籍においても、外賓の北海道巡覧・アイヌ巡覧については殆ど取り上げられていない。明治天皇の北海道巡幸におけるアイヌ巡覧については、明治政府の「同化政策」に関連し、アイヌは明治政府・開拓使によって天皇に「見せられる」対象として論じられてきた。また外賓の北海道巡覧を「観光」という観点から捉え、明治初期の北海道観光に関する先行研究を整理すると、この時期は現在でいう意味の「観光」が定着しておらず、内容には「視察」的要素が多いと論じられてきた。

以上を踏まえ、報告者は外賓の北海道巡覧・アイヌ巡覧について、開拓使文書等の行政文書及び『函館新聞』を中心とした資史料を精査し、従来の研究では公にされてこなかった事実を詳らかにした。特にアイヌ巡覧に関わっては、ハインリヒの森村での主張を検討した。ハインリヒはいわゆる「高貴なる野蛮人」としてのアイヌを求めて、森村での巡覧に臨んだのではないであろうか。報告者は、森村及び周辺地域のアイヌの「和風化」について分析した。その結果、当時の森村はアイヌの「和風化」が著しく進行しており、ハインリヒが求めていた「高貴なる野蛮人」としてのアイヌを確認できなかったため、近隣で追加の巡覧が行われたと推測した。

資史料精査・分析の結果、外賓による北海道巡覧の全体としては、北海道の産業に関する諸要素の「視察」という側面が比較的強く見られた。しかし各々の実態としては、4 者それぞれに異なる興味・関心を抱き、「視察」だけにとどまらない様々な巡覧の対象や目的・内容が存在することが明らかとなった。アイヌ巡覧に関しても同様の多様性が見られた。ヘンネッシーは近代化しつつある日本の一部分としてアイヌを捉え、ハインリヒは「高貴なる野蛮人」の表象としてアイヌを捉えていたと推測される。両者はそれぞれの興味を確認するために、アイヌ視察を行ったのではないか。外賓によるアイヌ巡覧は、単純に「未開」で「野蛮」なアイヌを「見物」するための巡覧には決してとどまらない、多様な目的の元に行われていたのであろう。

「イヨマンテ」像の変遷 - 儀礼研究に働いた力学と儀礼呼称の関係 -

平野敦史 (札幌大学大学院文化科学研究科)

本稿の主意は今日に浸透しつつある「イヨマンテ」像を、呼称を主な論材として批判的に見詰め直す所にある。ここに言う「イヨマンテ」像とは即ち、飼いグマ儀礼＝「イヨマンテ」、猟グマ儀礼＝「ホプニレ」といった儀礼呼称をも含めた分類的な解釈を指す。

研究史を眺める限り、現在に一般化しつつあるこうした理解が顕れ、定着し始めたのは1980年代に入ってからと、比較的最近のことである。しかもこの「イヨマンテ」型ならびに「ホプニレ」型という分類を、民族誌などに掲載された聞き取りの内容に照合し検討していくと、実際の用法とは基本的な認識において錯誤のあった理解である可能性が浮上してくる。

民族誌に記録された呼称は「送る」行為としてのみではなく、「送り」儀礼総体を指す場合もあり、それらは意識的に使い分けられていた。即ち「ホプニレ」は儀礼の各過程における行動を表す呼称として使用され、更には「送る」行為を示すその他の動詞とも互換的な関係にあり、且つそこでは動物の種類や飼育の有無といった基準は設けられていない。一方「イヨマンテ」にはそれぞれの動物を「送る」行為を表現する動詞としての用法だけでなく、儀礼総体を包括した名詞としての一面も覗えるものだった。

本稿ではこうした実例との齟齬が定着し得た背景について、20世紀以降の研究史を改めて辿る作業を通し探っていく。アイヌ文化研究に通底していた概念、即ちアイヌを「滅び行く」集団として対象化する概念は、本稿で扱う儀礼研究においても台頭していた。寧ろ「イヨマンテ」はそうした眼差しに論拠を与える習俗として象徴化された経緯があり、更にその目論見に適うと見做される情報は、その時々でそれぞれに異なる性質を持つ峻別を受けていた。

このような理念図を携えた研究動向に、戦後は一定の変化が加わった。即ち北方世界に点在するクマに関する習俗の異同が意識されるなか、飼育を介する儀礼と介さない儀礼への注意が、より厳密には飼育を介さない儀礼の存在への意識が高まったのである。この焦点の変遷を経ることにより、現今の一般的な理解である、形態差を基準に呼称を併置する儀礼像も醸成されていったのだろう。

更に北方世界におけるアナロジーが策定されるようになった理由もまた、研究史が顧みることなく内包した作為的な眼差しに起因していたのではないかと思われる。「近代化」の浸透を受け、様々な形で顕われたアイヌの反応を「和人化」とのみ扱った戦後直後までの儀礼研究者にとって、既に北海道からは彼等の願望を満たせる有り様が、「同化」の達成とアイヌ文化の「形骸化」により見込めなくなりつつあった。

外国人留学生在が境界を越えるとき
——北海道大学における日本人と留学生の文化交流を事例として——

町田裕斗（北海道大学大学院文学研究科）

本研究は、日本の大学に在籍する外国人留学生に関する文化人類学的研究である。本研究は、北海道大学における、日本人と留学生との関係性に焦点をあて、人びとの相互行為を微視的な視座から観察することで、その背景にあるマクロな文脈でのイデオロギーや政治性と、そうした政治性をも乗り越えていく新たな人びとの実践について考察することを目的としている。

従来の留学生を対象とした論考においては、留学当事者の内的側面に焦点をあてた精神医学・心理学に代表されるミクロな研究と、留学それ自体が発生する国際関係などに焦点をあてたマクロな研究の二つの潮流が主流であった。また、近年の傾向として異文化間教育学の分野において、留学というものをどのように当事者たちに有益なものにしていくか、といった実践的な研究も行われるようになってきている。しかしながら、留学をとおして留学生と現地の人びとがどのような関係性を築いているか、ということ进行らかにするような実証的研究はほとんど未開拓の状態のままであり、本研究において、北海道大学における外国人留学生と日本人との文化交流を事例に考察を加することで、留学生研究の空白部分を埋めることができると信じている。

本研究では具体的には、上述したような問題関心から、現代日本の留学をめぐる文脈において、日本人と留学生の相互行為にみられる形式性に注目する。相互行為のなかで、日本人は留学生に「日本文化」を提示し、留学生はそうした「日本文化」をまなざすことが期待されている。一方で、「文化交流」という名のもとに、留学生が日本人に対して「異文化」を提示するような非日常的な空間もしばしば立ち現われる。本研究はそうした留学生が文化を語るような場面を非日常的で儀礼的な空間であるにとらえ、そうした場面の背後にあるイデオロギーや政治性について考察する。また、そうした空間の出現を可能にするような、現代日本の留学をめぐる社会的文脈がどのように構成されてきたのかを歴史社会的に検証していきながら、留学生と日本人の相互行為における新たな実践が文脈自体をも変革していく可能性についても言及する。

本論文は、留学という複雑で多面性を持つ現象において、彼らの「外国人性・他者性」が強調される状況に注目している。学生としての側面と外国人としての側面を併せ持つ留学生たちは、「国際化」を促すための「文化交流」に動員されることで「外国人性・他者性」を際立たせることとなる。本論文は、そうした場面が持つイデオロギーであったり政治性といった次元から、留学という複雑な現象の持つ一側面について考察を進めていくものである。本発表では「文化を語る」側をホスト、客体化された文化を「まなざす」側をゲストとして考え、文化交流の文脈のなかで、そうした関係性が逆転する現象に注目し、その政治性について論じていく。

人とモノとの関係性から見る祭礼の形成－北海道江差町における姥神大神宮祭を事例に－
相澤聡也（北海道大学大学院 文学研究科）

本研究は、北海道の南西部に位置する江差町において毎年夏に行われている、「姥神大神宮祭(うばがみだいじんぐうさい)」を事例として、この祭礼を「人とモノとの関係性」という視点から検討し、同祭礼がどのように形成されているかについて明らかにすることを目的としたものである。

この祭礼はおおよそ 350 年前に始まったものとされているが、最大の特徴は、歴史のある豪華爛漫な山車が町内を練り歩く渡御祭であるという点にあり、現在は 13 台の山車が供奉されている。この 13 台の山車は、江差町の中の 17 の地区が所有しており、山車ごとに「保存会」という組織を形成し、山車の保存・管理に努めている。

本研究ではこの山車を一つの手がかりとし、山車というモノ(またそれに付随する、半纏や水引幕といったモノ)に、どのように人が係わり合っているかを通して、この祭礼について考察した。

本研究において「人とモノとの関係性」という視点からアプローチを行うのは、次の 2 つの理由による。一つは、人類学ではこれまで「material culture(物質文化)」という概念でモノ研究が行われてきたが、総じてモノに対する関心は軽薄であり、それは従来の人類学および民俗学における祭礼研究においても妥当すると考えるからである。もう一つは、「アクターネットワークセオリー」や、「マングルモデル」といった、主にテクノロジーの分野で近年論じられている枠組みを祭礼研究にも応用し、それらの枠組みの中で目指されている二項対立的な図式(個人か社会か、人かモノかなど)の克服を本研究でも目指したいと考えるからである。

研究の方法は、主に現地における聞き取り調査が中心で、その中でも山車の保存会の方と継続的に聞き取りを行った。その結果、以下のような結論を得るに至った。まず 1 点目に、祭礼においてモノは重要な役割を担うが、モノを創る主体が全てを規定しているわけではなく、モノ自体による制約(人とモノとの交渉)が存在し、祭礼を考える上でモノの存在、性質は無視できないということ。2 点目に、祭礼における「見せ場」や、「オーセンティシティ」という概念は、人とモノのどちらかの項だけに還元して説明できるものではなく、実際にはその二項の係わり合いの中で立ち現れてくるということ。3 点目に姥神大神宮祭の中で度々語られる「本物」という用語の内実には、一般的に想定されがちである本物志向的な文脈で用いられてきた「本物」という概念では捉えきれない、同祭礼が持つ特有なものがあり、「本物」という概念を問い直してくれるものであること。

以上のような結論は、初回のフィールドワークで得られた、ある 1 つの矛盾の検討を通して得られたものである。今回の発表では、その最初の矛盾から結論までに至るフィールドワークの様子を中心に発表を行うことにしたい。

映し合う映画と都市—群馬県高崎フィルム・コミッションにおける再帰的な都市イメージの創出

高橋良美（北海道大学大学院文学研究科）

本研究は、群馬県高崎市にある「高崎フィルム・コミッション」（以下、高崎FC）という組織を事例として、映像に映される都市と実際の都市との相互関係を、人類学や社会学で用いられる「リフレクシヴィティー（再帰性）」という概念によって明らかにするものである。

本研究の目的は、二つに大別される。一つは映像人類学に対する貢献であり、映像を記録の手段として用いる従来の映像人類学の姿勢に対し、映像を介した人びとの実践を考察するという点でこの学問に新たな知見をもたらすことである。

二つめの目的は、映画と都市の相互関係を明らかにすることである。高崎FCが行うロケ地誘致活動によって、高崎を舞台にした劇映画が撮影されるなど、映像のなかの高崎が全国に流通する。そうして形成される映像のなかの「高崎」と実際の高崎市と関係性を、ヴィクター・ターナーやアンソニー・ギデンズらが唱えるリフレクシヴィティーという概念によって分析する。リフレクシヴィティー概念は、社会が再生産される過程を分析する際に有用であるが、これまで人類学や社会学で別個に議論されてきた。本論文では、この概念について先行研究の整理を行った後、高崎FCの活動を分析する際の概念として用いた。

フィールドワークをもとに得た具体的な考察を以下に示す。

まず、高崎FCが自身の街を「ロケ地」として高崎外部へ紹介していくなかで、高崎のローカルな人脈が再編成されていること、また高崎市内の何の変哲もない場所が「ロケ地」として再活用されているといえる。極めて没个性的であった場が、映像に映し出されることによって特定性を得ることにつながり、それは最終的に観光資源となることが目指される。

また、高崎を舞台とした劇映画の制作など他者表象の介入は、高崎市民による高崎市の客体化を促し、映像と都市のリフレクシヴな関係を生み出した。これは、ターナーやギデンズのリフレクシヴィティー概念を応用して、映像の中の「高崎」が実際の高崎を内省する装置としての機能を有していると分析できる。また高崎では、もともと特定の都市イメージのなかった都市である高崎がリフレクシヴな作用を経てもなお、本質化されたイメージに回収されることなく匿名性のある街として維持されているという特性がある。

分析を総じて、実際の高崎と映画のなかの「高崎」が映し合い、作り合うという不断の相互関係のなかに、FCの活動が位置づけられるという結論を導いた。映像は、映すものと映されるものの間にあることで、両者の関係性や内部の役割を変化させ、または保持するという媒介性を有している。しかし、映像が生み出す再帰的な相互関係に注目した研究は、映像人類学では殆ど見られない。映像や観光、リフレクシヴィティーといった諸概念が重層的に関係し合う高崎市は、映像を方法としてみる既存の映像人類学では捉えきれず、総合的な映像人類学分野が真に策定される必要があると考える。

ランドスケープデザインにおける周辺性の表現とその可能性についての考察

片桐保昭（北海道大学大学院文学研究科）

人為的に作られた形態は、社会における何らかの意味や価値の現れと考えられてきた。しかし現代日本のランドスケープデザイナーたちは、社会的な価値観が反映しているとはいえ、かといって社会的な価値観を拒否する訳でもない形態を、理想と現実の狭間において敢えて表現する。本論は社会的な意味性が曖昧な形態が作られるこの過程を、専門家が社会に呼応した結果としての実践行為として、文化人類学的に考察するものである。

ランドスケープデザインにおいては、公的な機能性を追求するあまり、視覚的な意味性が肥大化したデザインが行われる。これに対しデザイナー達は、近代の価値においては機能的とはいえない形態にも価値を置き、目立たない位置にデザインする。このような非機能的なデザインは公的には行えないが、法や予算執行などの制度的な制約に対する実践として消極的に行われる。

この行為は作曲家が行うサウンドスケープデザインにおいてより顕著である。作曲家は「主観的」な表現が社会的に期待されるので、ランドスケープデザインにおいて周辺化されている、非機能的な形態を目立たないかたちでデザインする行為を積極的に行う。

この過程において表現された形態は、単純で均質な幾何学的形態の連続という点で近代以降のデザインと共通した特徴があるが、環境全体の中で目立たぬように配置されるという点で近代社会における価値観を表現したものではない。

明快な意味性を忌避した形態を表現するというデザイナーたちの実践過程は、先行形態の単純な再生産ではなく、社会的に構築されたオブジェクトに拘束される環境世界に対し、意味性が曖昧な要素を人為的に加え、個々人による解釈の可能性を高めるものと考察できる。

近代科学は環境世界を要素に還元し、その機能を分析してきた。これらの要素の総和が「空間」や「ランドスケープ」などとして対象化され、上のような「主観的」な価値は「美しさ」の問題として科学技術から分離された。しかし人間は意味や機能をもった形態の他に、意味のない形態も感覚し、これら両者が一度に感覚されたものに対して何らかの魅力を感じている。社会的な明快さと曖昧さが、ひとつの世界として感覚されるからこそ、その「風景」は「主観」的な「美」として浮かび上がり、デザイナーたちの表現の対象となるのだ。

このような形態は、社会的に構築されたものではなく、あくまで個々人の柔軟な解釈の結果として感覚され、表現される故に、社会的な意味が特定できない両義的な存在であると同時に、個々人にとって環境への解釈の可能性を広げるものとして風景の中に現れる。これは人間の感性の表現は、社会的に構築された価値の反映だけに終わらないことを示すものである。人間は自らを取り巻く環境に対して、社会的に構築された意味性を離れた独自の形態を付与していく可能性を示す一例といえよう。